

〈指導要領準拠〉

standard exercise

高校用



現代国語 標準問題集

(整理と演習)

広島大学教育学部 堀 芳夫 編著
附属高等学校教諭 白石 寿文

受験研究社

■ 本書をお買い求めになった **みなさんへお願い**

むだとむらなく学習でき、むりなく実力のつく問題集として、小学生・中学生・高校生みなさんに愛用されている〈標準問題集シリーズ〉です。ご使用になってのご感想はいかがでしょうか。みなさんの実力向上のための assistant の役めをじゅうぶん果たすことができましたでしょうか。

①どこがよかったか、どこがわるかったか、こういう点を改善してほしい など、本書使用後の感想をお寄せください。

②誤りのないよう万全の注意をはらっていますが、もし誤植や誤記、解答の誤りなどがございましたらお知らせください。

みなさんのご意見によって、後輩のみなさんのためによりよい本をつくりたいと思っております。ぜひご協力ください。

高校／標準問題集 現代国語

編著者 堀 芳 夫
白石 寿 文

発行者 岡 本 恵 年

発行所 受験研究社

(550) 大阪市西区新町 2-19-15 電話 大阪 (06) 532-1581 番 (代) 振替口座 大阪 47303 番

© (株)増進堂・受験研究社

④ 岩岡印刷・高広製本

はじめに

現代国語という教科は、「どうして勉強したらよいかわからない」「勉強はするけれども、どうも自分の力に自信が持てない」などと生徒諸君に不安を与え、勉強するのに難しい教科だと思われています。そのうえ、選択の自由はなく、必修科目として**高等学校授業科目の中心**となる位置にあり、**大学入試**でもほとんど選択の利かない重要科目となっています。日本に生きる者として現代国語の学習は不可欠であり、一応の学力をつけておく必要性が強いといえます。

特に、社会からの要請として、現代国語に大きな期待がかけられている一つに、**情報処理能力**があります。言葉による伝達・表現・理解・展開といった諸活動が、早くしかも正確になされる力を、これからの若い皆さんに求めているのです。言葉による表現力（文章を書く力・話す力）や言葉を理解する力は、急につくものではありません。日ごろの授業を中心に、毎日毎日、組織的・体系的に、根気強く、地味な学習を継続することが最も大切なのです。言葉による表現にできるだけ多く接し、言葉による表現をたくさん試みるのが第一です。しかし、そうした作業をただ漠然とやっても「自信」にはつながりません。文章に取り組むときの、私たちの視点をしっかり持つておく必要があります。

この問題集は、その視点を皆さんにしっかり持つてもらい、どんな文章に出会ってもズバリ核心をつかみ、的確に対処していける基礎力をつけてもらえるように工夫しました。どの章から練習してもらってもよろしいが、章内では順序どおり進めてください。必ず答えを文章で表現してみることをおろそかにしてはいけません。また、解答に頼らず、まず自力で考えるように努めてください。なお、この問題集は「**改定送り仮名の付け方**」「**当用漢字改定音訓表**」の趣旨を取り入れて編集してあります。がんばって、問題に取り組んでみてください。この一冊を終えるころ、きつとずっしりした手ごたえが、自信となって残ることを確信しています。

目次

第一章	口語文法の問題	一
-----	---------	---

一、文の成分

二、単語

三、敬語法

第二章	主題と要旨の問題	一五
-----	----------	----

第三章	構成の問題	三
-----	-------	---

第四章	内容の問題	四三
-----	-------	----

第五章	鑑賞の問題	八三
-----	-------	----

第六章	語句と文字の問題	九六
-----	----------	----

第七章	文学史の問題	一〇九
-----	--------	-----

第八章	総合問題	一二八
-----	------	-----

■新音訓のしおり		一三七
----------	--	-----

解答編		別冊
-----	--	----

■付録／国語の基礎的知識		裏見返し
--------------	--	------

第一章 口語文法の問題

一、文の成分



一、次の文章の中で、あとに抜き出した五組の文節群は、お互いにそれぞれどういう関係にありますか、答えなさい。

重たくなれこめた雨雲と、果てしない怒とうの荒波との見境いもつかない遠いはてから、荒波のうねりが幾十条となくけものようにおしよせた。そのうねりの白い波がしただけが真暗い海の上にかすかに光ってみえた。それはうねりの底からまき上がり、どうとくずれおち、ほえたてる海鳴りをどよませていた。

- (1) 「雨雲と」——「荒波との」 ()
- (2) 「うねりが」——「おしよせた」 ()
- (3) 「うねりの」——「波がしただけが」 ()
- (4) 「光って」——「みえた」 ()
- (5) 「どよませて」——「いた」 ()

解説 文節相互の関係には次の五つがある。

①主語・述語の関係……文において「が」という主題を示す文節(主語)を、「どうする」「どんなだ」「何々だ」と説明する文節(述語)で受ける関係を主語・述語の関係という。

②修飾語・被修飾語の関係……文中で、一つの文節が他の文節に掛かって、その意味を限定する関係を修飾語・被修飾語の関係という。この関係は、更に次の二つの種類に分けられる。

③連体修飾語の関係 一つの文節が、他の文節中の体言の意味を限定する場合。

④連用修飾語の関係 一つの文節が、他の文節中の用言の意味を限定する場合。

⑤対等の関係……文中で、二つの文節が対等の資格で並べられている関係を対等の関係という。

⑥付属の関係……文中の二つの文節のうち、一方が主となる意味を表し、他方がこれに付属して補助的意味を添える関係を付属の関係という。

⑦独立の関係……文中で、一つの文節が他の文節と直接の関係をもっていない場合、これを独立の関係という。

右の五つのうち、最後の独立の関係というのは、一つの文節が独立して他の文節と関係をもたないことをいうのであるから、二つの文節相互の関係を問うこの問題の場合にはあてはまらない。従って、他の四つの関係のうちから答えを選ばよいわけである。

文の成分の問題としては、文節のはたらきを問うものの外に、連文節(単に節ともいう)のはたらきを問うものがある。連文節というのは二つ以上の文節を一緒にしたものと呼ば名で、そのはたらきは、文節の場合に準じて考えればよい。

【例題】 次の文中の節は、それぞれ⑦⑧のどれにあたりますか。各文の上の()中に該当するものを、その記号で書き入れなさい。

⑦ 主語節 ⑧ 述語節 ⑨ 連体修飾語節

⑩ 連用修飾語節 ⑪ 独立節 ⑫ 対立節

(1) () 彼の兄は人望ある教育家で、弟は有名な実業家だ。

(2) () あれだけのことを一日で完成するなどまさかそんなことはできないだろう。

(3) () 陰で他人の悪口を言うのは自分の人格を下げることだ。

(4) () 気分が落ちついていないと、どうも仕事の能率が上がらない。

(5) () 我々はその光景のすばらしさに時のたつのも忘れて見ていた。

(6) () 街路樹が美しくならんでいる町を通りぬけて野原に出た。

(和歌山大)

注意 対立節というのは、文節相互の関係でいうと、対等の関係にある。また、(2)の「あれだけのことを一日で完成するなど」は、下に「そんなこと」と言い換えられているので、直接には掛かる連文節をもっていない。

二、次の文について、あとの問いに答えなさい。

「美しい花が咲いた」という文では、(A) () という文節と、

(B) () という文節は、(一) () (二) () の(1) () 修飾の関係にあるわけだが、この二つの文節の連合したものが、さらに(C)

() に対して、(2) () 関係を結んでいる。つまり(D) ()

という(3) () の文節に対して、(E) () という文節群が、(4) () の役目をなしているわけだ。こういうふうになじっさいに

は、甲の文節と乙の文節が(三) (四) () の関係にあり、しかもその全体が、さらに丙の文節と関係を結んでいる、といった場合が多い。しかもそういう場合、(五) () 文節の方は、それ一つ

だけの場合にせよ、いくつも続く場合にせよ、ともかく最後の(六) () 文節へかかってゆくのが普通だ。

問(一) 右の文中、(A) () (B) () (C) () (D) () (E) () に該当する言葉を記せ。

(同じ言葉を二度使ってよい。)

(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
-----	-----	-----	-----	-----

問(二) 右の文中、(一) () (二) () (三) () (四) () (五) () (六) () に該当する語を次の(a)～(d)から選び、記号で記せ。

(a) 言い切る (b) 言いさす (c) うける (d) かかる

(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)
-----	-----	-----	-----	-----	-----

問(三) 右の文中、(1) () (2) () (3) () (4) () (5) () (6) () (7) () (8) () (9) () (10) () に該当する語を次の(ア)～(イ)から選び、記号で記せ。

(ア) 主語 (イ) 述語 (ロ) 形容語 (ハ) 接続 (ニ) 並立 (ヘ) 独立 (ホ) 主述 (ヘ) 連用 (コ) 連体

(1)	(2)	(3)	(4)
-----	-----	-----	-----

(早稲田大)

考え方

まず、「美しい花が咲いた」という文が「美しい」連体修飾語、「花が」主語、「咲いた」述語という三つの文節から出来ていることをつかむ。「……という文節と……という文節は……修飾の関係にある……この二つの文節の連合したものが、さらに……に対して」という記述に注目すれば(A)(B)(C)が分かってくる。「こういうふうに……」以下は、それまでのことを、一般的に言い換えたものにすぎない。なお「かかる」と「うける」、「言いさす」と「言い切る」がそれぞれ相応じる語であり、前者が修飾と被修飾の関係、後者が主述の関係に使われることに注意する必要がある。



一、次の文を読んで、あとの問いに答えなさい。
修飾語がいくつも続く場合、どれを先にするかは一定自由である。

- (a) 白い大きな花 (b) 大きな白い花

という二とおりの言い方の間には優劣がない。しかし、実は「白い」と「大きな」のように、性質も長さも同じような修飾語の場合には問題にならないのだが、性質や長さに違いのある修飾語の間では、その順序をどうするかによって文章のよしあしがまっ

てくる。
文章を書く心得を述べた、ある本の中に、修飾語に関して次の三つの条件があげられている。

条件一 長い修飾語をさけること。

条件二 修飾語は修飾される語のすぐ前におくこと。

条件三 長い修飾語と短い修飾語とがあるときは、短い修飾語の方を修飾される語のちかくにおくこと。

このうちの条件三は、修飾語の順序を規定したもののだが、この心得は、たとえば次のような文をなおすのに生かすことができる。

両国は軍縮を段階的に核兵器の削減に重点を置いて進めるといふ方式をとることに意見が一致した。

この中の「①」「②」「③」という三つの修飾語は、みな「④」にかかるものであり、その限りでは同じ資格をもっている。しかし、この文の中では「③」を「①」「②」の前へもっていった方が読みやすい。これは、もちろん内容も関係することだが、「③」が「①」「②」にくらべて長いせいもあると思われる。

問(一) 「①」「④」に該当する語句を記せ。

①	②	③	④
---	---	---	---

問(二) 問題文にいう「条件一」に反する、最も長い修飾語を次の文から見つけ、——線をつけよ。

毎年膨大な財政の赤字を出すことが示す地方自治制度の欠陥に対して根本的な対策をきめることが、こんどの国会の大きな使命の一つである。

問(三) 次の甲・乙・丙から、「条件二」「条件三」に反する文を、それぞれ一つ選び、記号で記せ。

甲 この選挙でかわっているのは、日本のように候補者の名前を書いて投票するのはいなかだけで、投票機という機械が都会の投票場においてはあって、投票する人は、自分の選びたい人の名前の所にあるハンドルをガチャンと押すだけでよい。

乙 ぼくは今、このあいだお父さんと後楽園へ野球を見に行った帰りに、夕食を食べた食堂の前の本屋で買った本を読み終わった。

丙 水道一本引くだけで、グッとその町の乳幼児の死亡率は低くなるのであって、これはミルス・ラインケの現象といって有名だが、上下水道を改善すれば、消化器系の伝染病ばかりでなく寿命ものびるそうだ。

条件二

条件三

(神戸大)

問(一)は、「……語句を記せ」とあることに注意。答えは一文節とは限らない。問(二)は、問題文の長さに惑わされないように。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① ヒョロのモンジャはいくるめられて、帆柱をよじのぼりはじめた。クブクブよりはじょうずだった。彼はてっぺん近くまでのぼって、カモメにむかって手をのぼした。するとカモメはひょいとびたつて、すこし横の帆の端にとまった。モンジャは苦勞をして、からだをずらして、もう一度手をのぼすと、カモメはひょいと反対側の帆の上に移った。

「おい、何をしている?」「ダメだあ。こいつには羽がある。」「そんなことははじめからわかっている。そんな片手なんかのばさないで、両手をいっぺんに使え!」と、デブのナンジャが下からどなった。そこでヒョロのモンジャは両手をのぼした。アツというまもなかった。彼のからだは空中で一回転して、帆柱の根元で上を見あげていたナンジャの上に落っこってきた。ガラガラ、ドシン! これが逆で、デブのナンジャが落っこってきたのなら、もっとものすごい音がしただろう。

クブクブは、もうがまんできなかった。片手で口をおさえて、片手でおなかをおさえて笑ってしまった。実際とんでもないことをしたものだ! フウフウいって起きあがったふたりは、すごい顔をしてクブクブをにらみつけた。

「へこういう事件の直後、次のような場面があらわれる。」

② 「おまえは、このおれのこともうらんでいたのだろう?」とヌボーはつつつた。「おれはおまえをわざと助けなかった。い

やなことや苦しいことががまんできなければ、一人まへの船乗りになれないからな。いいかね、クブクブ、海は美しくやさしいときもあるが、とてもおそろしく冷たくなるときもある。おまえはだんだん強くななくちゃいけないんだよ。」クブクブはこっくりとうなずいた。そうやって、やさしいことばをかけられると、今までがまんしていた涙がかえってでてきて困った。クブクブはそっと涙をふいた。恥ずかしかったからだ。「それじゃクブクブ、あのふたりはおまえにどんな無理なことをいったんだい?」「あのカモメをとれって……」「なんだ、そんなことか。」と、ヌボーは笑った。「そんなことならわけではない。カモメなら釣ればいい。」「つるの? 鳥がつれるの?」「つるるとも。やってごらん」クブクブはヌボーに教わって、カモメつりをはじめた。太いつり針に魚の肉をつける。そして糸をつけて海にほうりこむ。すると、ほんとうにカモメがつれたのだ。上空を舞っていたカモメが、サッと舞いおりたかと思うと、つり針もろとも餌をのみこんだ。たぐりよせると、羽をバタバタやってカモメがつりあげられた。「ウワッ、ほんとうだ!」とクブクブはさげんだ。「ねえ、ヌボー。これはカモメなの、アホウ鳥なの?」「そんなこと、おれが知るわけじゃないか。なにしろおれは前にもいったとおり、アタマが弱いんだから。だが、カモメはいくつも種類がある。アホウ鳥だってそのひとつだ。」「ねえ、ヌボー。あなたが頭が弱いなんて、ウ

ソでしよう？ だってカモメをつる法だってちゃんと知ってるんだもん。」「いいや、クブクブ。」と、ヌボーは首をふった。

「カモメをつる法を知っていたって、ちっとも頭がいいことにならない。おれは長いこと海にいたから知っているだけなんだ。なにかを覚えていても、頭のいい証拠じゃあない。その知識から自分でくふうして、応用ができる人が頭がいいのだ。バカの一つ覚えていうじゃないか。たとえば百でも千でも、覚えていてもそれだけじゃあやっぱりバカなのだ。」「でも、ヌボーが頭がわるいとは思えないよ。」と、クブクブは心からいった。「それはなあ、こういうことなんだ。」「と、大男ヌボーは海に目をやりながらいった。「同じ人間でも、いつでも同じようにバカや利口なのじゃない。利口な人でも、急にバカなことをしたりする。バカはいっだってバカだけじゃない。ときには、利口な人以上に利口だったりする。」「大男ヌボーは、ひとりごとのようにつぶやいた。「利口になったりバカになったり、それが人間というものだよ。」

問 ②の文章は、会話の部分を除くと十七の文から成っている。

これらの文について、次の問いに答えよ。

(1) 各文末部に最も多く使われている助動詞は、どういう意味を表しているか答えよ。

(2) (1)の答えに該当しないすべての文末部を、文節で抜き出して書け。(文節ごとに改行して書くこと。)

(3) (2)で答えたもののうち、！記号をつけるのに最も適切な文末部を、文節で示せ。

〔広島大〕

〔5〕 北杜夫「船乗りクブクブの冒険」の一節。

(1) 文末表現の問題で、この文では「た」が最も多い。

(2) 「餌をのみこんだ」「クブクブはさげんだ」は、前の音便形の影響で、「た」が「だ」になった。

三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文の性質を、文末に示される話し手の表現意図によって分ければ、次の三種類が考えられる。

a — 断定・推量・決意・疑問・感動など、表現される事柄の内容についての話し手自身の態度を示すもの。

b — 命令・誘い・呼びかけ・応答など、話し手の聞き手に対する伝達の気持ちを示すもの。

c — aとbとの両者を兼ね示すもの。

次の例文中、右のbに属する文はどれか。

(1) この天気夕方までもつかしら。

(2) 明日は雨になりそうですね。

(3) 先生の御健康を祝して、乾杯！

(4) 金輪際口をきくものか。

(5) 昔は隅田川で白魚がとれたんだよ。

〔防衛大〕

のように、「である」体の文章は文末が「である」になることが多いが、「である」の外にも、「でない」「であろう」「できる」「ねばならぬ」「ている」「ほかならぬ」などの語もよく使われる。

問(一) (A)(B)へ 一内の各①②のうち、例に挙げた文章の意味が通るように、それぞれ一つずつ選んで番号で答えよ。

問(二) 〰線部⑦⑧の品詞はそれぞれ何か。またそれらが活用する語であれば、〰線部の活用形を示せ。(徳島大)

㊦ 一般的な論文の文体としての「である」体について、実際の文例を挙げ説明したものである。この文例はやや難しい。問(一)の④、あとの「哲学は真に現実的になり得る」が手掛かりとなるだろう。問(二)の⑦は、そのあとが読点になってはいるが、これを受ける体言が見当たらない。従って、切れる形と考えてよい。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

自分がつね日ごろしたいと思っても、いろいろな遠慮からできないでいることを、だれかほかの人がしたりすると、驚きと羨望の意味をこめて、わたしには勇気がないなどと考えたり、言ったりする。しかし勇気というのは、そんな時にすぐ言っている言葉なのか。わたしたちが日ごろしたいと思っていることには、いろいろな邪悪な欲望があるはずである。わたしたちが敢えてそれを実行しないのは、遠慮があり、恐れる気持ちがあるからだ。ひとはこのような恐れを弱さとして、そのような恐れをのり越えた行動に、恐れを知らぬ勇ましさを見るわけなのだろう。し

かし恐れを知らぬということが、すぐに勇気となるのかどうか。

それは、無自覚、センスの欠如、恥しらずなどによる場合が少なくない。勇気は何ものも恐れないうような、単純なことではないのである。むかしの人は勇気について、⑤恐るべきものを

⑥恐れ、恐れざるものを恐れないうことにあると言った。勇気は、

⑦恐れなしに単純にあるのではなくて、いつも恐れと共にあると言わなければならない。恐れるいわれのないことを⑧恐れるのは、

たしかに臆病であり、卑怯である。しかし恐るべきものを恐れる

のは、むしろ勇気の一部である。世間の非難を恐れることも、時

により正しいこともあれば、また正しくないこともある。わたし

たちは、三尺の童子の無邪気な眼をも⑨恐れなければならないこ

とがある。そして、恐るべきことと恐るべからざることとの区別

に迷わなければならないこともある。勇気のもとには、正しい認

識がなければならない。

問 〰線⑦⑧について、次の問いに答えよ。

(1) この中に、一つだけ、他とは品詞を異にする語がある。それはどれか。左の解答欄(省略)に記号で答えよ。

(2) また、一つだけ、他とは活用の種類を異にする語がある。それはどれか。その記号、活用の種類、及びここでの活用形を左の解答欄(省略)に答えよ。(高知大)

㊦ 田中美知太郎の「心のページ」の一節。(1)は動詞と名詞の、(2)は下一段活用(口語)と下一段活用(文語)の違いである。

② 単語のはたらき



一、左の文中の□の中に適当な漢字を書き入れなさい。

(漢字はまず目が丁度埋まるようにすること)

解答例 品詞

単語は自立語と付属語とに分けることができる。この二つの區別は、それらが単独で①□□になることができるか、できないかによる。副詞は②□□□で③□□□のない単語である。副詞は用言を修飾するはたらきがあるが、ある種の副詞は、そのほかに④□□を修飾することも、他の⑤□□を修飾することもある。

二、次の文中の——線を施した言葉は副詞です。ある副詞には、それを受ける言葉に、特別な言い方があって、その受け方を誤ると、正しい文にはなりません。

次の□の中に適当なかなを書き入れなさい。(かなはまず目が丁度埋まるように書きこむこと)

- (1) 私は断じてそのようなことはします□□。
- (2) 私は先生に「父はたぶん来る□□□□。」と申しました。
- (3) この雨では、さぞお困りで□□□□。
- (4) そのままでは、どうも自分の考えがうまく表さ□□□□た。
- (5) まさかそんな心配はな□□□□が、やはり心配だ。

(東京工大)

一、の①、②、③は、単語の分類のところを参照。副詞は普通、用言を修飾するが、ある種の副詞(程度を示す副詞)は、その外に次の

ようなはたらきをもっている。

1、もつとゆつくり歩きなさい。……他の副詞を修飾している。

2、ずっと昔のことでした。……名詞を修飾している。

また、副詞はその性質によって次の三つに分類される。

1、情態の副詞 例 につくり笑う ゆつくり歩く

2、程度の副詞 例 とてもうれしい 少しわかった

3、陳述の副詞 例 恐らく雨だろう 決してやるまい

二、の問題は、この中の3、陳述の副詞に関係するものであるから、それぞれの副詞が要求する特別の受け方を知っておかなければならない。「断じて」と「どうも」は否定の受け方、「たぶん」「さぞ」は推量の受け方、「まさか」は否定+推量の受け方をそれぞれ要求する。

各品詞には、それぞれ特有のはたらき、性質があるので、それをよく理解しておかなければならない。その主要なものを次に挙げる。

①動詞 未然、連用、終止、連体、仮定、命令の六つの活用形をもち、終止形は、すべてう段で終わる。また、その活用形の仕方によって、五段、上一段、下一段、サ行変格、カ行変格の五つの種類に分かれる。

②形容詞 未然、連用、終止、連体、仮定の五つの活用形をもち、終止形は、すべていで終わる。活用の方は一種類しかない。

③形容動詞 未然、連用、終止、連体、仮定の五つの活用形を

もち、終止形はすべてだで終わる。活用の仕方は一種類しかない。

④名詞 性質やはたらきによって、普通名詞、固有名詞、数詞、代名詞の四つに分類される。

⑤副詞 前問の解説参照。

⑥接続詞 文と文を接続するものと、語と語とを接続するものとの二つがある。また、その接続の仕方には、順接、逆接、並列、添加、選択などがある。

⑦感動詞 その性質によって、感動、呼び掛け、応答などに分けられる。

⑧助動詞 用言と同じように活用するが、どの活用形をもつかは語によって様々である。活用の仕方は、動詞型の活用、形容詞型の活用、形容動詞型の活用、特殊な型の活用の四つに大別される。また、それぞれ固有の意味をもっているが、中には一つの言葉で、幾つもの意味をもつものがある。

⑨助詞 そのはたらきによって、格、接続、副、終の四つに分類される。また、各助詞はそれぞれ固有の意味をもっているが、中には、一つで、幾つもの意味をもつ助詞がある。

【注意】「連体詞」は、連体修飾語となる以外の特別の性質をもたないので省いたが、この品詞は他の品詞から転成したものが多いので、その点に注意する必要がある。

B

「次は、現代語の形容動詞についての文法的説明です。よく読んで、あとの問いに答えなさい。」

「おだやかだ」「しずかだ」「確実だ」「じょうぶだ」といった一群のことは、学校で教える文法では形容動詞と呼ばれることが多い。しかし、一方ではこれらを名詞＋断定（指定）の助動詞「だ」と考えるという意見もある。前者の見方によれば「しずかだ」「じょうぶだ」などは、それぞれ①□であると考えられるわけだが、後者によればそれぞれ②□ということになる。

ところでこの問題については、次のような事実をあげることができる。

a 「しずかだ」「じょうぶだ」などには、「非常に」「すこし」といった③□がついて「すこししずかだ」「非常にじょうぶだ」ということができるが、「非常に」「すこし」といった④□はつくことができない。

b 「おだやか」「しずか」「じょうぶ」などは、「しずかはしずかだが……」「風はしずか、波もおだやか……」「じょうぶもじょうぶ、ぶつてもたたいてもビクともしない」などのように、それらに直接「は」「も」といった⑤□がついたり、またはそのままで現れたりしている例がないわけではない。

a の事実とは④□。もっとも、これは「しずかだ」「じょうぶだ」全体を一つの単語と見るとを支持する事実とはいえない。

い。それに対して、bの事実は⑧□。もっとも、これは「しずか」「じょうぶ」などを名詞と見るとを支持する事実とはいえない。

このようなわけで、いわゆる形容動詞の文法的扱いについては、いろいろめんどろな問題がある。むしろ、このように簡単にはかたづけられない、どっちつかずの性格そのものが、「しずかだ」「じょうぶだ」などの一群のことばを他と区別する特徴なのかもしれない。

問(一) 空欄①～⑤それぞれに最も適当と考えられる語句を左の中から選び、記号で答えよ。

- ⑦係助詞 ①格助詞 ②副助詞 ③接続助詞 ④文章 ⑤一つの単語 ⑥二つの単語 ⑦二つの短文 ⑧二つの文 ⑨連用修飾語 ⑩連体修飾語 ⑪連用修飾語＋動詞 ⑫連体修飾語＋名詞 ⑬名詞＋係助詞 ⑭名詞＋格助詞 ⑮名詞＋接続助詞 ⑯形容詞 ⑰形容動詞

問(二) 空欄A、Bそれぞれに最も適当と考えられる文を左の中から選び、記号で答えよ。

⑦「しずか」「じょうぶ」などの部分を名詞と見るとに有利な事実である。

④「しずか」「じょうぶ」などの部分を独立した単語と見るとに有利な事実である。

⑨「しずか」「じょうぶ」などの部分を名詞と見るとに不利

な事実である。

⑨「しずか」「じょうぶ」などの部分を独立した単語と見るとに不利な事実である。 [東京外大]

例1

現代口語文法の形容動詞に対する考え方を述べた文章である。形容動詞を二語に分けて考えるのは時枝文法の考えだが、その考え方について、a あてはめにくい場合、b あてはめやすい場合の指摘を見抜くこと。問(一)の④は、④か⑤かよく迷うが、口語では一語と考えるし、③との関係もあるから④だろう。問(二)で、a文は「独立単語」でなく「名詞」であることの、b文は「名詞」であることよりも、「独立単語」であることの検証文と見るべきである。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ことばは国民のもの、社会のもの、その存在は国民大衆の意識の上にかかっている。しかも、この民衆意識のあり方、そしてその偉大さは、最もよくことばの上に現れるものである。ことばを通じてみる民衆意識の偉大さは、黙々として、たとえば国語整理の大業をやっている、古典時代に九種もあった動詞の活用を、四段(五段)と一段とに整理しつづけることなどでも、それがわかるのである。だれが発起したともなく、いつ皆が賛成したともなく、ただ民衆は、せいぜいものを言うときにはわかってもらえよう、びったり言おうとする。恐らく民衆のことばにもつ関心は、そんな程度のことではないのであるのに、子どものような単純な大衆の類推力が、少数を多数に同化してならしてゆく結果、しらすしらす、こういういかなる天才も、夢にも企てなかったこ

とを、その大なたの下に、黙々として実行しているのである。全く無目的に流れて、流れているとも見えない大川の水のような、この民衆心理の活動ばかりは、一本のつえを突き立てても、流れをせき止めることができないと同じに、一片の法令や一個人の考えなどで、左右することなどできるものではないのである。これが言語の本質である。

問 — 線部で古典時代に九種もあった動詞の活用を、四段（五段）と一段とに整理しつつあるとあるが、次の①～⑤の五つの古語の動詞は、あとの⑦～⑩のうちどれにあたるか。それぞれ一つずつ選んで、その記号を書け。

- ① 有り ② 起く ③ 受く ④ 死ぬ ⑤ 蹴る
⑦ 下二段から四段（五段）へ ⑧ 下二段から下二段へ
⑨ ナ変から四段（五段）へ ⑩ 上二段から上二段へ
⑪ ラ変から四段（五段）へ ⑫ 上二段から四段（五段）へ
- 〔東京水産大〕

三、「そうだ」という助動詞は、意味の上、及び接続の上から、次の二つに分けられます。

- A、行きそうだ。（様態）
B、行くそうだ。（伝聞）

この二つの「そうだ」の活用形を、それぞれ次の文の上下の部分がよく接続するように、A 、B の中に書き入れなさい。活用形のないものは の中に×印を記しなさい。

〔例〕 書かせ A だ。 B そうだ。

- (1) あの山は高くて、けわし A B みえる。
(2) お父さんはいたいへんお元氣 A B 、わたくしは安心しました。

- (3) 彼は、この筆が書きよ A B と言った。

- (4) そのことを知らな A B ようすをしていた。

- (5) 彼に行くつもりが無 A B ば、わたくし一人で行く。

- (6) 明日は行かれ A B が、きょうは行かれないだろう。
〔東京工大〕

〔注〕 様態の「そうだ」は、未然・連用・終止・連体・仮定の五つの活用形をもつが、伝聞の「そうだ」は、連用と終止の二つの活用形しかもない。また接続は、様態の「そうだ」は動詞及び動詞型活用の助動詞には連用形から、形容詞・形容動詞には語幹から続き、伝聞の「そうだ」は活用語の終止形から続く。

同じ語形で、二つ以上の意味または活用をもつ助動詞には、「そうだ」の外に次のようなものがある。

れる・られる（受け身、可能、自発、尊敬）、
う・よう（推量、意志）、た（過去、完了、存在態）、
まい（打ち消しの推量、打ち消しの意志）、
ようだ（たとえ、不確かな断定、例示）

三、敬語法



一、次の文中の□(1)～(7)に該当するものをあとの⑦～⑩の中から選び、記号で答えなさい。

〈敬語〉には「今日、お客さまがいらっしゃる」「あの方そうおっしゃるんです」における「いらっしゃる」「来る」の敬語)「おっしゃる」「言う」の敬語)の動詞などがある。この種の動詞は、もともと(1)□について用いるもので、(2)□の言動などについて使うことは全然ないといってよからう。

〈謙語〉はこれと反対に(3)□に向かうという心持ちを表すもので、動詞には「さし上げる」「うけたまわる」のように、それぞれ「遣(や)る」「聞きとる」に対応するものなどがある。これは(4)□の言動について述べるのがふつうだが、(5)□に対してする言動について述べるときにも使われる。「あなたがお客さまにさしあげたんですか」などのように。

〈丁寧語〉は話しぶりがぞんざいにならないように、主に話し手の心の慎みを表すものといわれている。「何々がある」というかわりに「何々がございます」という場合には、話し手が下手(しもて)にあってものをいう態度をはのめかすものの、述べている事からは自分の言動にかかわっていない。別に(6)□に敬意を表するわけではない。(7)□に対する話しぶりを粗野なものにしないように、上品にふるまうという態度がこの種の語調の使い

方によって示される。

⑦自分が下位にいて上位の人 ⑧話し手自身 ⑨自分が敬意をさし向ける相手方 ⑩主格に立つ者 ⑪話し手が敬意を表する相手方に対しての自分 ⑫対話の相手方 ⑬話し相手や第三者が自分の敬意を表すべき他の人 [早稲田大]

解説 敬語には、次の三種類がある

(1) 尊敬語 (問題文では、単に「敬語」となっている) 相手や第三者の主体、動作、状態、所有物などに用いて、その人を直接に尊敬する。

(2) 謙讓語 (問題文では、単に「謙語」となっている) 自分の主体、動作、所有物などに用いて、間接的にその人に尊敬の気持ちを表す。

(3) 丁寧語 話の聞き手や、書物の読者に対し、言葉遣いを丁寧にして敬意を表する。このうち、(2)「謙讓語」は、常に自分の動作につけるとは限らない。時には尊敬する人に対する他人の動作にも用いることがある。以上のような理解をもとにして、適当な選択語を選んでいく。

敬語表現をする場合には、次のような語を用いる。

- (1) 尊敬 ①接頭語、接尾語(お体) ②特殊な名詞(貴君)
 ③特殊な動詞(おっしゃる) ④尊敬の助動詞、補助動詞(話される)
 (家内) ③特殊な動詞(申す) ④謙讓の補助用言(お話しいたす)
 (3) 丁寧 丁寧の助動詞、補助用言(話します)